

ダビデは成熟した人だったのか
—サムエル記～列王記と詩篇に基づく
共同体的視点からの評価—

ランドル・ショート

ダビデの成熟を測るアプローチについて

ユダヤ教徒やキリスト教徒の中には、ダビデを模範的な信仰者として見る人は多い。それは、ダビデの過ちにもかかわらずというのではなく、詩篇などを参考にしながらダビデの過ちへの対処の仕方を評価しているということもある。今回、私たちが関心を持っているのは、ダビデの「信仰者としての成熟度」である。特に、新約聖書に見られるような意味合いで、「ダビデは、社会や信仰共同体に生きる信仰者として成熟した人物だった」と言えるかどうかについての判断を試みたいのである¹。そのためには、可能な限りダビデの神への献身的な言動だけでなく、ダビデが他の人々とどのように関わったのか、つまり、家族や仲間・同朋、上司や部下、女性や男性、友人や敵、非ユダ族の者たちや外国人とどのように関わったのかに関心を持つ必要がある。

¹ 新改訳 2017 の旧約聖書には「成熟」という言葉は一度しか使われていない。「成熟した女性」という意味合いでエゼキエル書 16 章 7 節で用いられているだけである。それに対して、新改訳 2017 の新約聖書の中では、τέλειος と τελειότης という 2 つの言葉は、「成熟した人たち」(I コリ 2:6)、「一人の成熟した大人」(エペ 4:13)、「成熟した者」(コロ 1:28; 4:12)、「成熟」(ヘブ 6:1)、「成熟した」(ヤコ 1:4)と訳されている。特筆のない限り、日本語聖書の引用は新日本聖書刊行会訳の新改訳 2017 を使用する。

「ダビデは成熟した人だったのか」という問いに対する答えをどこに求めればよいのだろうか。言うまでもなく、ダビデの人生を語るサムエル記と列王記はその一次情報源となるであろう²。ダビデの内面を反映していると言われてきた詩篇はどうだろうか。現代の多くの学者が考えているように、詩篇の表題の歴史性は疑わしいもので、サムエル記～列王記物語に登場するダビデについて何らかの結論に至るのには詩篇を用いない方が賢明であると思われる。しかし、そうすると、詩篇の表題を素直に受け入れて、詩篇 51 篇などの詩篇をサムエル記～列王記の歴史物語と引き離すことの出来ない読者からは、「それらの詩篇こそがダビデの霊性、ダビデの成熟度を見事に反映しているのではないか」と言われ、物足りなさが残るだろう。そういう読者の期待を想定して、実験的にサムエル記と列王記から浮かび上がってくるダビデ像を、ダビデの人生の特定の場面に関連づけられているいくつかの詩篇で補うこととする。「実験的に」というのは、表題等に基づいてダビデに起因すると思われる詩篇をダビデが実際に書いたかどうかという、純粹に歴史的な問題は脇に置き、「この時やあの時のダビデが祈った言葉であったと考えるならば」という仮説的なアプローチをとり、ダビデの成熟度を測ることを試みるということである³。

² ダビデと関連している物語等を記載している歴代誌も重要な情報源とはなるが、紙面の関係上、今回はそれを取り扱わないこととする。

³ 詩篇の表題の歴史性に関しては、例えば J. L. Skinner, *The Historical Superscriptions of Davidic Psalms: An Exegetical, Intertextual, and Methodological Analysis*, Ph.D. Dissertation (Berrien Springs, Mich.: Andrews University, 2016); Susanne Gillmayr-Bucher, "The Psalm Headings: A Canonical Relecture of the Psalms," in *Biblical Canons* (Leuven: Leuven University Press, 2003), 247–254; Roger T. Beckwith, "The Early History of the Psalter," *TynBul* 46 (1999): 1–27; F. F. Bruce, "The Earliest Old Testament Interpretation," *OtSt* 17 (1972): 37–52; Brevard S. Childs, "Psalm Titles and Midrashic Exegesis," *JSS* 16 (1971): 137–50 等を参照。

ダビデが全イスラエルの王になる前

1. 第一サムエル記 21 章～27 章

ダビデは、彼がサウルから逃げている第一サムエル記 21 章～27 章の場面では、「人への恐れ」は、「神への恐れ」よりも大きいように描かれている。例外として、第一サムエル記 24 章と 26 章では、「主に油注がれた者」であるサウルを殺すチャンスがあったものの、ダビデは殺すのをやめたと書かれている。サウルを殺せないで、一方では、ダビデには「戦うか、逃げるか」の選択肢しかないようである。主に油注がれたサウル王と戦って彼を殺すことは、神を恐れているために、ダビデにとっては選択肢ではない⁴。そのため、ダビデとその部下たちは、「そこここと、さまよ」うしかなかった。そして「神はダビデをサウルの手に渡されなかった」(I サム 23:13–14)。しかし、物語の中では、いくつかの重要な場面で、ダビデが人間に対する「恐れ」から行動していることも明確に描かれている。

まずは、第一サムエル記 21 章 10～15 節の場面である。ダビデは、ペリシテのガテという町の王アキシュのもとに逃げ込む。そもそもダビデがガテに行くべきだったのかどうか、疑問の余地は十分にある。ノブでは、ダビデはエポデそのものよりも、エポデのうしろの布に包まれた「ペリシテ人ゴリアテの剣」(I サム 21:9) に興味を持っていたようである。また、ケイラ (I サム 23:9–12) やツィクラグ (I サム 30:7–8) の時のように、ダビデがどこに行くべきか主に尋ねたはつきりとした形跡はない。その直後、預言者ガドによれば、ユダの地が彼の行くべき場所であることがわかった (I サム 22:5)。いずれにしても、聖なるパンとペリシテ人の剣を調達した後、「ダビデはその日、ただちにサウルから逃れ、ガテの王アキシュのところに来た」(I サム 21:10)。しかし、アキシュ王のしもべたちがダビデを「王」と呼び、ダビデの名声を語ると、ダビデは「ガテの王アキシュを非常に恐れ」るようになった (I サム 21:11–

⁴ I サム 24:6–7, 10; 26:9–11, 23–24; II サム 1:14 を参照。

12)。大きな恐怖のあまり、彼は気が狂ったふりをして、アキシュ王に気が変になっているとして見下されるのである（Iサム 21:13-15）。

アキシュ王への恐怖は、人間として普通の反応であろう。ダビデの人を恐れる気持ちは理解でき、親近感も持つこともできる。しかし、聖書の読者は、このペリシテ人の王を前にしたダビデの心の状態と、エラの谷にいたペリシテ人の最も偉大な戦士と軍隊を前にしたダビデの心の状態との間の著しいコントラストを見逃すことはできない。サウルと「全イスラエル」が、ペリシテのチャンピオンを見て、その言葉を聞き、「彼の前から逃げ、非常に恐れた」（Iサム 17:11, 24）のに、ダビデだけは恐れなかった。それどころか、ダビデは主に対して完全な信頼を持っていたが（特に Iサム 17:45-47 参照）、ガテへの最初の逃避行物語の中では、そのような主への信頼は見受けられない。また、後にツィクラグで大きな危険にさらされた時に、「ダビデは自分の神、主によって奮い立った」とあるが（Iサム 30:6）、ガテに逃避した時にはそのようなことは記されていない。したがって、最初のガテの物語だけでは、ダビデが「成熟した人」であるとは言えず、信仰者として「成熟した行動」をとっているとも言えず、せいぜい「必死に行動している」という程度である。

2. 物語の中で詩篇をダビデの祈りとして読むことについて

次は詩篇 34 篇と 56 篇を見ていきたいのだが、その前に、解釈上の大事なポイントを確認する必要がある。

まずは、ヨナ書を参照していただきたい。ヨナ書 2:2-9 に記されている祈りは、多くの詩篇と基本的に変わらない。ユダヤ教徒であろうと、キリスト教徒であろうと、ヨナ書 2 章の祈りがその文脈無しに礼拝の中で朗読されたら、その祈りを「不完全な祈り」と考える信仰者はいないであろう。独立した形ではヨナ書 2:2-9 の祈りは詩篇にでてくる「感謝の祈り」に負けないほど立派な祈りだと言える。しかし、伝統的な注解者を含む多くの注解者の間では、ヨナ書全体の中で 2:2-9 の祈りは、ヨナの成長のみならず、ヨナの未熟なところをも暗示しているのだと理解されている。考えてみれば当たり前のことである。独立した形で見れば「完全な祈り」とされている祈りであっても、ある物語の中

に挿入される時、その物語のコンテキストの中で読まれることによって、その祈りの捉え方が変わってくるはずだ。つまり、読者が物語の中に出てくる祈りを読む時、その祈りの前後の出来事や対話、祈っている人物の人格などについても考慮しながらその祈りとその物語の総合的な意味を考える必要が出てくるからである。例えば、ヨナはいかがだろう。注解者たちはヨナの「立派な感謝の祈り」を読んでヨナをどう評価するのだろうか。ヨナは救われたことに対して感謝をささげているが、まだ悔い改めていない。水夫たちに対して高慢だ。自己中心的な祈りではないか、等々と評価されている⁵。全体の物語がその祈りによって解釈されるだけでなく、その祈りも全体の物語に照らされて解釈されるのである。そして、ヨナの霊性や成熟度は、その総合的な意味によって測られるのである。

本稿の中で扱っていく詩篇 34 篇、56 篇、51 篇、3 篇の冒頭にある表題は、ダビデの人生における三つの危機的なエピソードと結びついているのである。単独で読めばどれも美しく完璧な祈りだと言える。しかし、特定のエピソードに記されている出来事を体験したダビデの祈りとして読む時、ヨナ書の中で 2:2-9 の祈りを読む時と同じ現象が起きるのである。すなわち、これらの祈りは、部分的にはあるが、ダビデ物語というコンテキストの中で読まれる時、ダビデの謙りや成長もあるかも知れないが、自己理解の不足や、その他の未熟なところが暗示されているのだと読み取れる。

3. 詩篇 34 篇

まず、詩篇 34 篇について考えてみたい。4 節から 6 節までは真実味がある。例えば、ダビデが「私が主を求めると 主は答え／すべての恐怖から 私を救い

⁵ 例えば、John Goldingay, *Daniel and The Twelve Prophets for Everyone* (Louisville, Ky.: Westminster John Knox Press, 2016), 155; R. C. Sproul, ed., *The Reformation Study Bible: English Standard Version* (Orlando, Fla.: Reformation Trust, 2015), 1566; Rosemary A. Nixon, *The Message of Jonah: Presence in the Storm* (Nottingham, England: Inter-Varsity Press, 2003), 141-142; Warren W. Wiersbe, *Be Amazed* (Wheaton, Ill.: Victor Books, 1996), 77 等を参照。

出してくださった」(詩34:4)とアキシュ王から逃れた直後に祈っている姿を想像することができる。しかし、これが成熟した祈りであれば、ダビデはアキシュ王の前で見せたように、神よりも人を恐れていたことを告白し、悔い改めるのではないか、そんなふうに考えるのは自然だろう。アキシュ王の前では、本当はダビデは人を恐れていた。しかし、7節と9節を見る限り、ダビデが救われたのは、健全な主に対する恐れによることであったと祈っているように見える。

また、ダビデは「ガテの王アキシュを非常に恐れた」(Iサム21:12)だけでなく、人に対する恐れを克服するためにはまだまだ長い道のりがあることが、この後のエピソードでも分かるのである。その一端を、ヨナタンが「神によってダビデを力づけ」、ジフの荒野のホレシュでダビデの恐怖心を鎮めようとした時に垣間見ることができるのである(Iサム23:16-17)。しかし、サウルから逃げている間、神の導きが何度も劇的に示されたにもかかわらず、ダビデは、やはりジフの荒野でサウルとの最後の出会いの後、恐怖心をあらわにしている(Iサム27:1-2)。読者は、ダビデがまだ気づいていないことを知っている。つまり、ダビデはガテへの最初の逃避中、またその後になっても、人間に対する恐怖心を克服していないということである。ダビデが「来なさい。子たちよ私に聞きなさい。／主を恐れることを教えよう」(詩34:11)という言葉言うのは、自己認識が著しく不足しており、したがって、精神的な成熟度が不足していることを示しているのではないだろうか。この段階では、ダビデは「主への恐れ」を教える立場にはない。少なくともサウルが生きている間は、「主への恐れ」を教える立場にあったとは思われない。そして、サウルがいなくなると、ダビデは一気にその力を強めるのである。自分の息子アブサロムを逃がして再び逃亡することになるが、全く同じような試練を二度と受けることはない。

ガテに戻ったダビデが、主に「身を避け」たと主張するのも少し無理がある(詩34:8)。自分が身を避けたのは気が変になったふりをしたという偽りによ

る行動だったが、「唇に欺きを語らせるな」(詩34:13)と他人に要求するのもやや偽善的だと言えるかも知れない⁶。

最後に、ダビデが自分を「正しい者」の一人と評価していること(詩34:17, 19)を、成熟した評価として受け入れることは困難である。特に、ガテに逃げ込む直前のノブでのダビデの明らかな失敗のために、イスラエルで起きていた出来事を考えるとなおさらである。「祭司の町ノブ」では、「男も女も、幼子も乳飲み子も…牛もろばも羊も」「剣の刃」で虐殺される(Iサム22:18-19)。ダビデ自身も、唯一の生き残りであるエブヤタルに、ノブでエドム人ドエグを見たとき、自分が適切に必要な行動を取らなかったためだと認めている(Iサム22:22-23)。

他方では、少なくともダビデがここでエブヤタルに告白して誓ったことは、責任ある大人の行動と見ることができる。

4. 詩篇 56 篇

次に、詩篇 56 篇について考えてみたい。13 節は、このガテでの経験にふさわしいものである。そして 8-10 節と 12 節も特に問題にはならない。しかし、1-2 節と 5-7 節は、この特殊な状況に当てはまるとすれば、大げさに言っているように見える。また、仮にダビデが 3 節の「心に恐れを覚える日／私はあなたに信頼します」を素直に祈れたとしても、4 節と 11 節を考えてみるとどうだろうか。これは、第一サムエル記 21 章 12 節でダビデが「ガテの王アキシュを非常に恐れた」と書かれているのとは本質的に正反対である。

また、これが成熟した祈りであるのなら、彼が恐れていたのは、この少し前に他のペリシテ人を前にして戦場で大胆に宣言したこと(Iサム17:37)を一瞬見失ったからだろうと言わざるを得ない。繰り返しになるが、ガテでの危機に対するダビデの反応は、全く正常である。異常な状況下で異常な恐怖を経験することは、成熟しているとか、未熟であるとかいう問題ではない。この種の

⁶ Mary J. Evans, *The Message of Samuel: Personalities, Potential, Politics and Power* (Nottingham, England: Inter-Varsity Press, 2004), 126 もこの点を指摘している。